聖書と説教　　2024 年 7 月 28 日（日）聖霊降臨後第 10 主日

新約聖書 ヨハネによる福音書 6 章 1 節―21 節（新共同訳）

[1]その後、イエスはガリラヤ湖、すなわちティベリアス湖の向こう岸に渡られた。[2]大勢の群衆が後を追った。イエスが病人たちになさったしるしを見たからである。[3]イエスは山に登り、弟子たちと一緒にそこにお座りになった。[4]ユダヤ人の祭りである過越祭が近づいていた。[5]イエスは目を上げ、大勢の群衆が御自分の方へ来るのを見て、フィリポに、「この人たちに食べさせるには、どこでパンを買えばよいだろうか」と言われたが、[6]こう言ったのはフィリポを試みるためであって、御自分では何をしようとしているか知っておられたのである。[7]フィリポは、「めいめいが少しずつ食べるためにも、二百デナリオン分のパンでは足りないでしょう」と答えた。[8]弟子の一人で、シモン・ペトロの兄弟アンデレが、イエスに言った。[9]「ここに大麦のパン五つと魚二匹とを持っている少年がいます。けれども、こんなに大勢の人では、何の役にも立たないでしょう。」[10]イエスは、「人々を座らせなさい」と言われた。そこには草がたくさん生えていた。男たちはそこに座ったが、その数はおよそ五千人であった。[11]さて、イエスはパンを取り、感謝の祈りを唱えてから、座っている人々に分け与えられた。また、魚も同じようにして、欲しいだけ分け与えられた。[12]人々が満腹したとき、イエスは弟子たちに、「少しも無駄にならないように、残ったパンの屑を集めなさい」と言われた。[13]集めると、人々が五つの大麦パンを食べて、なお残ったパンの屑で、十二の籠がいっぱいになった。[14]そこで、人々はイエスのなさったしるしを見て、「まさにこの人こそ、世に来られる預言者である」と言った。[15]イエスは、人々が来て、自分を王にするために連れて行こうとしているのを知り、ひとりでまた山に退かれた。

[16]夕方になったので、弟子たちは湖畔へ下りて行った。[17]そして、舟に乗り、湖の向こう岸のカファルナウムに行こうとした。既に暗くなっていたが、イエスはまだ彼らのところには来ておられなかった。[18]強い風が吹いて、湖は荒れ始めた。[19]二十五ないし三十スタディオンばかり漕ぎ出したころ、イエスが湖の上を歩いて舟に近づいて来られるのを見て、彼らは恐れた。[20]イエスは言われた。「わたしだ。恐れることはない。」[21]そこで、彼らはイエスを舟に迎え入れようとした。すると間もなく、舟は目指す地に着いた。

※第 1 朗読と第 2 朗読は末尾に掲載

説教「満腹した」

本日の福音書には、イエスの起こした二つの奇跡が記されています。

一つ目は、「五千人の養いの奇跡」、すなわちイエスが大麦のパン五つと二匹の魚をもとに、五千人に食べ物を分け与えた奇跡。二つ目は、イエスが湖の上を歩いた奇跡です。

それまでの病人を癒すイエスの奇跡は人々をひきつけ、大勢の群衆がイエスの後を追ってきました。その後に起きた「五千人の養いの奇跡」は、イエスの奇

跡の中でも最も重要なものの一つで、ヨハネ、マルコ、マタイ、ルカの全福音書がこれを記しています。

それは、イエスがご自分の周りに集まってくる群衆にパンを食べさせようとする、次の言葉から始まります。

「この人たちに食べさせるには、どこでパンを買えばよいだろうか」。

こう言いながらも、実は既にイエスは、自分がこれから成すことを知っていました。人はパンだけで生きるものではないが、人はパンなしで生きることはできません。パンの欠乏、飢えが、人間にとっていかに辛く苦しい、深刻な事態であるか。人々の食を満たすためのイエスの愛が、この奇跡の前提になっています。

弟子の一人のアンデレがこう言いました。「ここに大麦のパン五つと魚二匹とを持っている少年がいます。けれども、こんなに大勢の人では、何の役にも立たないでしょう」。

五つのパンと二匹の魚 —— それはわずかなもの、小さいものを象徴しているかのようです。およそ五千人の人々を前にして、それは何の足しにもならないように思えます。

このパンと魚は、子供が持っていたものでした。一般的に子供は、自分の食べ物を人に分け与えることをあからさまに嫌がる面があると思います。自分の持っている食べ物を差し出すというのは、子供心にはかなり抵抗を感じることかもしれません。ですがこの時、この子供は、純真な心でそれを差し出したのではないでしょうか。

イエスはそのパンを取り、感謝の祈りを唱えてから、座らせた人々に分け与えました。

イエスはここで、何もないところからではなく、子供の持っていた五つのパンを用いて、それを祝福して割き、人々に分け与えました。また、魚も同じようにして、欲しいだけ分け与え、そこにいた人々はすべて満腹しました。

イエスは、大麦のパン五つと二匹の魚で、五千人ほどを養い、しかもさらにその「パン屑」の残りが十二のかごにいっぱいになりました。

ここでは「パン屑」と訳されていますが、「屑」と訳された言葉は、原文では「割かれたもの」を意味する言葉が使われています。ここは、ちぎったときに散らばる「パン屑」というよりも、食べられる大きさに割かれたパン切れと考えた方がいいでしょう。

これは、単なる食の提供だけでなく、イエス自らの身体である生命のパンが人間に与えられたことを意味します。そしてパンの残りが十二の籠にいっぱいに

なったことは、イエスの恵みの賜物があふれるほど豊かであることを意味しています。

聖書において十二は完全を意味する数で、満たされた状態、完成した状態を示す数字です。人々は満腹し、神の恵みによって霊・肉ともに満たされたのです。

子供が自分の持っていた「大麦の五つのパンと二匹の魚」を、もし手放さずに自分だけで握りしめ、それをイエスの前に差し出すことがなければ、それは何の広がりもない、それだけのものだったでしょう。

「五つのパンと二匹の魚」は、空腹の大勢の人々の前では、小さなもの、わずかなもの、役に立ちそうにないものに見えても、その子供にとっては大切なものだったでしょう。

わずかなもの、これを差し出してしまったら自分が欠乏するのではないかと思えるものも、思い切って主に差し出し、主の祝福を受けると大きくなり、主の御用のために何倍、何十倍、何百倍にも用いられるという神の国の摂理を、イエスは私たちに教えています。

また、この「五千人の養いの奇跡」は、イエス・キリストと食卓を共にする交わりを象徴しています。私たちが礼拝においていただく聖餐も、そのもとは、イエス・キリストと共にする食事から始まっています。福音書には、イエスが共にした食事の出来事が非常に多く記されています。それはイエスとの交わりの印象深い思い出の多くが、実際にイエスと共にした食卓の場面に関係していたことの反映であると思われます。

イエスは、人々を神の国へと招かれたのですが、その招きは、喜びと祝福への招きであり、そのことを具体的に示すのは、食卓の場面です。神の国はしばしば、福音書の中では、食事や婚宴の席にたとえられています。食事の時は、一日の中での休み、いこい、養い、喜び、祝いと交わりの時です。神は、日ごとの食事を通して、私たちを喜びと祝いへと招いてくださるのです。

日ごとの食卓の交わりは、キリスト者を主イエスに結びつけ、また人と人とをお互いに結びつける重要な時です。私たちにも、日々の食卓を、その重さにふさわしく受け止め、過ごしていくことが求められているのではないでしょうか。

本日の福音書に記されている、イエスのもう一つの奇跡は、イエスが湖の上を歩く奇跡です。

湖の上を歩くイエスは、多くの絵画のモチーフにもなっており、光輝くイエスが描かれていたり、描く人によって様々です。

あなたの中での、湖の上を歩いているイエスの姿を心に浮かべてみてください。

何が正解かというのは、ないと思います。

もしかするとそこには、私たちの痛みと苦しみを受けて、血まみれになりながら湖を渡り、私たちに手を差し伸べてくださるイエスの姿があるかもしれません。

湖の上を歩いてきたイエスは、弟子たちにこう言いました。

「わたしだ。恐れることはない」。

主イエス・キリストが湖の上を歩いてきて、私たちの手を握ってくださる。私たちはもう、何を恐れることがあるでしょうか。

どんな時も、主が私たちと共にいてくださることを覚え、希望と喜びの内に日々を歩んで行きましょう。

＊＊＊＊＊＊ 説教ここまで ＊＊＊＊＊＊

以下、本日に関連する聖書箇所（第１朗読と第２朗読）です。

旧約聖書 列王記下４章 42 節―44 節（新共同訳）

42 一人の男がバアル・シャリシャから初物のパン、大麦パン二十個と新しい
穀物を袋に入れて神の人のもとに持って来た。神の人は、「人々に与えて食べ
させなさい」と命じたが、43 召し使いは、「どうしてこれを百人の人々に分け与
えることができましょう」と答えた。エリシャは再び命じた。「人々に与えて
食べさせなさい。主は言われる。『彼らは食べきれずに残す。』」44 召し使いがそ
れを配ったところ、主の言葉のとおり彼らは食べきれずに残した。

新約聖書 エフェソの信徒への手紙３章 14 節―21 節（新共同訳）

14 こういうわけで、わたしは御父の前にひざまずいて祈ります。15 御父から、
天と地にあるすべての家族がその名を与えられています。16 どうか、御父が、
その豊かな栄光に従い、その霊により、力をもってあなたがたの内なる人を
強めて、17 信仰によってあなたがたの心の内にキリストを住まわせ、あなたが
たを愛に根ざし、愛にしっかりと立つ者としてくださるように。18 また、あな
たがたがすべての聖なる者たちと共に、キリストの愛の広さ、長さ、高さ、
深さがどれほどであるかを理解し、19 人の知識をはるかに超えるこの愛を知る
ようになり、そしてついには、神の満ちあふれる豊かさのすべてにあずかり、
それによって満たされるように。
20 わたしたちの内に働く御力によって、わたしたちが求めたり、思ったりす
ることすべてを、はるかに超えてかなえることのおできになる方に、21 教会に
より、また、キリスト・イエスによって、栄光が世々限りなくありますよう
に、アーメン。

教会讃美歌 236 番「いのちのことばは」1,2,3 節、260 番「主イェス・キリストよ」1,2,4 節、290 番「ガリラヤの風」1,2,3 節、250 番「つくられしものよ」1,2,3 節、245 番「神のみことばは」1 節